

石田英敬編

『知のデジタルシフト』 弘文堂、2006年

論文集となれば、たいていは各執筆者の専門・関心領域の文章が並び、編者の「はじめに」や書名が、事後的に力業により雑然に秩序を与えることになる。本書は、これとは異なり、巻頭論文（石田）が歴史的な展望から〈知とテクノロジー〉の問題系を礎として呈示し、その土台の上を第二論文（吉見）で確立される〈百学連環〉が水平の転回を続けることで、確かな磁場が形成されるところから探究がはじまる。

第二セクションのインタビューや報告では、自然言語と視覚表現のナレッジインタラクション（東大先端研）、知の連環を可視化する自然言語処理エンジン（東大工学部）、またテレビ番組のメタデータ処理や、逆にことばからテレビ番組を生成するソフトウェア（NTT、NHK）など、本書の磁場の天蓋を突き破るように最先端の場へと接近してゆき、後続のセクションでの人文知からの深い思索にリレーされる。ここで一貫しているのは、「知のインターフェース」としてのデジタル・テクノロジーという捉え方である。先端研でのインタビューで印象的なのは、「ART Tools」の開発者たちが、あくまでも「人間が使用するツール」（中小路久美子）として新技術を考えている、つまり技術はわたしたち主体の知恵を助ける道具であるとの認識が明瞭に語られている点である。

現代の人文社会系の〈研究者にとっての〉最良の啓蒙書だといえよう。編者の巻頭の言が断言しているように、今日なにかを表現しようと

する者はメディア環境のデジタル・テクノロジー化を無視することはできない。〈知〉を〈伝達する〉研究者であればなおさらのことである。このことに眼を覆ってきた、たとえば西洋近代の文化の威光でことたれりとしてきた、文学科系は全国の大学で凋落が著しい。だがこの「失われた10年」を嘆くよりも、まず「知のデジタル・シフト」という好運を逃さないようにすることとしよう。

本書の問題提起には、仏哲学者ベルナル・スティグレルの知見と、ミシェル・フーコーの「アーカイヴ」の概念が要石となっている。石田論文では、アルファベットの成立（音声・文字のデジタル的統合）による歴史と再帰的な社会制度（記憶と認識の公共化）の誕生、活版印刷による文字と主体の分離（手・脳の延長の自律化）、そして今日のデジタル・メディアといった人間存在の来歴が一貫性をもって語られる。その上に「情報記号論」の成果が立っている。スティグレルのメディアの歴史哲学は、従来のメディア論になかった人文知の深みと、綿密な技術史の知識に裏打ちされたものである。評者自身この面での研究の出発点は、スティグレルの成果に負っている。しかしながら、この数年「存在」（論）の問いを忘却してしまっていた。本書の底流に、情報記号のデジタル化時代の存立と、そこに関係を結ぶわたしたちの主体の実存、また先端技術の論理性から成る「存在論／オントロジー」があることで、わたしたちがなにを忘れてしまっているのかを思い起こさせてくれる。

最先端の産業・技術の開発の動向を交え、学界と現場の共同作業とせめぎ合いを一望する本

書の意義は大きい。

原 宏之



原 宏之 (はら ひろゆき)

1969年12月3日生まれ

【専攻領域】 教養 (表象メディア論/言語態分析)、比較思想史

【著書・論文】

『<新生>の風景』、冬弓舎、2002

『バブル文化論』、慶應義塾大学出版会、2006

『言語態分析』、慶應義塾大学出版会、2007

【所属】 明治学院大学教養教育センター

【所属学会】 日本社会情報学会、日本フランス語フランス文学会